仮面の王

激情態

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
仮面の王

【Ｎコード】
Ｎ１０６５Ｍ

【作者名】
激情態

【あらすじ】
１人の少年がいた。その少年はその天賦の才を持つがゆえにずっと１人だった。少年は成長し、人と交わって少しずつ成長していく。

prologue

とある屋敷

そこには1人の少年がいた。木に寄りかかり、本を読んでいた。しかし、少年の周りには誰もいなく、少し離れたところに子供たちが集まって遊んでいた。しかし、少年はそれに見向きもせず、手元にある本をその鋭い双眸でじっと読んでいた。すると近くにいた少年たちがその少年に近寄ってきた。

近寄った少年1「相変わらず本なんか読んで友達はいないのかよ！」

近寄った少年2「無能に友達なんかできるわけがないよな、ごめんごめん。ハハハ！」

少年『・・・』

近寄った少年3「オイ、なんとか言えよ！」

少年『・・・うるさい。』

近寄った少年1「何か言ったか？」

少年『・・・わめくしか能がないのか、屑共。』

近寄った少年「やんのか、無能のくせに！」

そう言って、２人が少年に攻撃をしようと動いた。

男性「おやおや、やめなさい。」

物腰の柔らかそうな男性が現れた。

近寄った少年１「僕たちは悪くない、アイツが僕たちのことをバカにしたんだ！」

近寄った少年２「そうだそうだ、無能のくせに。」

男性「それでもいけませんよ。ほらあっちにお行きなさい。」

２人「「はーい。」」

そうして、2人は離れて行った。

男性「申し訳ございません。重々注意させておきますので。」

少年『・・・どうでも良い。』

男性「分かりました、では。」

そう言って、男性は離れて行った。しかし、その表情は少年を馬鹿にした感じではなく、むしろ恐怖さえ感じていた。

少年『・・・つまらないな。』

少年はそう呟いた。その瞳には何の感情も含まれていなかった。

Ｅｐｉｓｏｄｅ１　力（前書き）

ええ、これから幼少期を書いていきます。頑張っていきますのでよろしくお願いします。

Episode1　力

とある寺院

そこの入口前に1人の老人と、少年が立っていた。2人とも寺院の入口までにある、異様なほど長い階段を上っていたにもかかわらず、疲れた様子は無かった。

老人「さて、ここがお主が住むことになる場所じゃ。」

少年『・・・』

老人「わずか1カ月半ぐらいしかおらんじゃろうが、家族のように思っていて良いぞ。」

少年『・・・どういうつもりだ、川神鉄心。』

鉄心「何がかの？」

少年『俺をここへ連れてきた理由だ。』

鉄心「フム、理由が必要かね。知りたいのならば、お主のアレを使えばよかろうに。」

少年『・・・』

鉄心「まあ、安心せい。あそこのような扱いをするわけではない。」

少年『・・・同情か？』

鉄心「ほっほっほ、さてどうかのう。さて、お主には相手をして欲しい者がおるんじゃよ。」

少年『相手？』

鉄心「そう、ワシの孫じゃが、ちと強すぎてのう。相手を探しとったんじゃ。」

少年『・・・何故俺を？』

鉄心「お主の本当の力ぐらいわしにも分かる、だからじゃよ。それに、ここは楽しいぞ。絶対に気に入ると思うんだがのう。」

少年『・・・良いだろう。』

鉄心「それに、あの馬鹿孫は夏休みの宿題を終わらせるか分からなくてのう、そっちもお願いしたいんじゃ。お主、頭が良いじゃろう。」

少年『・・・分かった。』

鉄心「では、中に入ろうかのう。」

そう言って、2人は寺院の中に入って行った。

少女「オイ、ジジイ。そいつは誰だ?」

鉄心「ジジイというな、馬鹿孫。この子はワシの知り合いの孫でな、陽神総真(ひのかみそうま)と言う子じゃ。一時期だけじゃが、ここで修業をすることになった。」

総真『・・・よろしく。』

少女「私の名は川神百代だ。よろしくな、弟よ。」

総真『弟？』

百代「ああ、ここで修業をするということは私はお前の姉弟子だ。それに、舎弟というものが欲しかったからな。」

総真『・・・意味がわからん。』

百代「そういえば、お前は強いのか？」

総真『・・・別に。』

２人が話していると、２人の男性がやってきた。

男性１「こいつが、あの陽神の落ちこぼれっ子って奴か。」

男性2「釈迦堂！子供に向かってなんてことを！」

釈迦堂「良いじゃねえか、現実を教えといたほうがさあ。いちいち堅えんだよ、ルー。」

ルー「まだこの子は子供だゾ！」

鉄心「良い、2人とも。モモよ、お前は今からこの子と戦うんじゃ。」

百代「オイ、ジジイ！どういうことだ。」

鉄心「それで良いかの。」

総真『・・・ああ、問題ない。』

百代「聞けよ！私に弱い者いじめをしろって言うのか！」

鉄心「では、修練場に行こうかのう。」

そう言って、5人は修練場に向かった。

川神院　修練場

そこには総真と百代が対峙していた。他の3人は少し離れたところに立っていた。

ルー「しかし、本当にやらせるんですカ？」

釈迦堂「くどいぜ、ルーよ。どうせあのガキも身の程を知らねえんだろうな。」

鉄心「それはどうかのう。」

釈迦堂「何だよ、師範。モモの奴が負けるってのか？」

鉄心「そうではないが、どうなるかまだわからんということじゃよ。」

ルー「師範、それは一体どういうことでしょうカ？」

鉄心「見ておれば分かるぞ。」

そうして、３人は２人を見た。

百代「良いか、無理だと思ったらすぐにギブアップするんだぞ。」

百代は手加減するつもりであった。実際彼女には総真が強くは見えないし、これから自分の弟になる（予定の）子だから、結構心配していた。

総真『・・・なあ。』

百代「ん？なんだ。」

総真『・・・あんたは、強いのか？』

百代「当然だ、同年代で私に勝てる奴なんていないさ。」

総真『・・・そうか。』

百代「さあ、来い！」

百代がそう言うと同時に、百代が消えた。そして、百代が立っていた場所に総真が立っており、次の瞬間には壁が崩れていた。

ルー・釈迦堂「「なっ！」」

鉄心「だから言ったじゃろうに、あのアホ孫が。」

釈迦堂「オイ、師範！ありゃ一体どういうことだ！」

ルー「そうです。彼は一体」

鉄心「2人は何故、陽神が名を馳せてきたと思っておる？」

釈迦堂「そりゃあ、強いから？」

ルー「高い政治力を有してもいますシ、古くから存在しているからですカ？」

鉄心「フム、それもある。しかし、彼らの真の力はそういうものではない。」

ルー「では、一体何なんでしょうか？」

鉄心「それはな、彼らの持つ眼じゃ。」

2人「「眼？」」

鉄心「そう、彼らの一族はその眼の力で名を馳せてきたんじゃ。それゆえ、彼等は煌武院と並ぶとまで言われておる。」

ルー「そんなにですか？」

釈迦堂「どういった力なんですか、それは。」

鉄心「その眼にはいくつか段階があっての、第一段階が超動体視力。

使い手によってが銃弾の雨を超スローモーションで見ることもできる。ちなみに今の太陽のように紅い眼の色がその泰一段階じゃ。」

釈迦堂「なるほど、あの年で第一段階だから、無能とか言われてんのか。」

鉄心「いや、あの年で第一段階はあり得んよ。若くても１０くらいにならんと目覚めんのじゃよ。」

釈迦堂「じゃあなんでアイツは落ちこぼれなんだ。むしろ天才って奴なんじゃないのか。」

鉄心「あの子はの、生まれたときにはもう、その瞳に第三段階の領域まで行っとったんじゃ。しかし、あの子の父親があの子を恐れ、力を封印し、無能と言ったんじゃ。」

ルー「なんという、親がすべきことではナイ！」

鉄心「しかし、ある事件で彼等は別の意味であの子を恐れるようになった。」

２人「「ある事件？」」

鉄心「そう、彼が3歳の時に封印が破れ、幻と言われた第四段階の力を発現したんじゃ。」

ルー「幻の、第四段階？」

鉄心「そう、かつて初代のみが発現した、森羅万象全てを見通すと言われる瞳。その両眼には、変わった紋章が浮かび上がると言う。そして、あの子はそれ以来、あのような性格になってしまった。誰も信じず、誰にも頼らなくなってしまった。」

ルー「そうだったんですカ。」

鉄心「そして、一族の大人で誰もが恐れている中、あの子の祖母であり、先代当主である陽神天真（ひのかみてんま）はあの子を我が子のように大切にしておった。むしろ、時々家族の間を超えている感じもあったが、ともかくその天真にその力をどうにかして引き出してほしいと言われたんじゃ。ワシもあそこにいるよりはこっちにいたほうが良いし、モモの良い相手となると思ったんじゃよ。」

釈迦堂「おいおい、今なんかヤバいのが混じってたぞ。」

ルー「あっ、百代が出てきたネ。」

ルーの言うとおり、百代が壁から出てきた。

百代「はあはあ、まさかこんなに強かったとは。ジジイには感謝だな。相手と弟がいっぺんに手に入る。」

総真『・・・まだやるか？』

百代「ハハハハッ！当然だ、こんな強い奴とやり合えるんだぞ。これがやらずにいられるか！」

総真『！？』

総真はびっくりした表情に変わった。今まで、自分が少し力を出すと、皆たやすく怯え、相手にしなくなったというのに、目の前にいる少女はまるで玩具でも見つけたかのように楽しんでいる。

百代「それに、お前も楽しそうじゃないか。」

総真『・・・何？』

そう、総真もまた軽くだが、笑っていたのだ。今まで誰1人自分には勝てなかった。大人たちでさえ自分を恐れていた。他の子供たちが時間をかけて覚える技や気を使った術などはすぐに覚えられた。知識もあの力を使い、遥かに高かった。今まで、互いを高め合う好敵手がいなかった。しかし今、それが目の前にいることを心が感じ取ったのだ。

総真『・・・そうだな、こんな感覚は初めてだ。しかし、悪くは無い。』

百代「良いな、私もこんなのを待っていたんだ！」

そう言って、百代は総真へと駆けて行った。それを見た総真もまた、百代へと向かって言った。

2人『「ハアァァ！！」』

そうして、2人は衝突した。

釈迦堂「・・・・」

ルー「・・・・」

鉄心「ほっほっほ、生き生きしとるのう。」

ルー「いやいや、そんなもんじゃないですヨ！」

釈迦堂「良いねえ、ゾクゾクしてきやがった、俺も混ざるぜ！」

ルー「釈迦堂、さっきまで馬鹿にしてたクセに行こうとするんじゃナイ！」

鉄心「どれ、ワシも混ざろうかのう。」

ルー「師範！あなたもお止めくださイ！」

鉄心「じょ、冗談じゃよ。そう怒るな、ルーよ。」

ルー「ふう、しかしそろそろ決まりますネ。」

鉄心「そうじゃのう。」

そう言って、総真たちを見ると、総真が百代に殴り飛ばされていた。

総真『くっ、何故？』

百代「当然の結果だ。お前はそんなに武術の訓練をしたわけじゃないだろう、むしろそれでありながら私と互角に戦えることが凄いぞ。」

総真『そうか、俺の負けか。しかし、決して気分は悪くない。』

百代「ま、姉である私に勝つにはまだまだってことだな。」

総真『・・・そうだな。だが、次負けるつもりはない。』

百代「いやあ、私もウカウカしてられないな。」

総真『弟に負ける姉と言うやつか？』

百代「まだ負けるなんて、って今、なんて言った？」

総真『・・・何も言ってない。』

百代「なあなあ、もう一度言ってくれないか。」

総真『・・・うざい。』

百代「ひどいぞ、弟ぉ。」

総真『ひっつくな！』

百代「良いじゃないかぁ。」

鉄心「楽しそうでなによりじゃよ。」

百代「ジジイ。」

そこには鉄心たちがいた。

鉄心「どうじゃ、ここは。良いところじゃろう。」

総真『・・・ああ、そうだな。』

鉄心「では、陽神総真。川神にようこそ。」

鉄心はそう言って、手を伸ばした。

総真『・・・ああ、よろしく。』

そう言って、総真は手を握り返した。

Ｅｐｉｓｏｄｅ２　川神（前書き）

感想を書いてくださった方、本当にありがとうございます。これからもがんばっていきたいと思います。

Ｅｐｉｓｏｄｅ２　川神

あの戦いの後、総真は川神の弟子の１人となり。百代とともに修業をしていた。あれから、未だ笑顔にこそならないが、少なくとも百代たちには心を開いていた。それゆえに百代たちの言うことは割と従っていた。それを見た鉄心たちはこぞって総真を可愛がった。総真からしてみれば、祖母以外に感じたことのない感情を受けているため、戸惑ったりすることが多く、それが鉄心たちをより一層可愛がらせる要因となっていた。釈迦堂やルーも兄呼ばわりされており、割と満更ではないという表情であった。百代に至っては、最初のころは姉と無意味に呼ばせることも多かった。鉄心に至っては毎日会うたびに小遣いを与えていた。ちなみに、それを見た百代が鉄心にお小遣いをねだっていた。

また、川神院では自ら率先して、家事手伝いや修行僧へと関わっていたため、弟のような扱いをされていた。家事は最初のほうこそうまくいかなかったが、数日でだいぶ完璧にマスターしつつあった。

平凡だが、そこは総真にとって確かに幸せな時間であった。

川神院　修練場

そこには総真と百代が再び対峙していた。釈迦堂もそばで見守っていた。互いが攻撃をすれば、それを避けるの繰り返しで、互いにダメージを与えられていなかった。

百代「ハアッ！」

総真『クッ！』

釈迦堂「また、百代の勝ちだな。」

百代「ハッハッハ。さあ、罰としてピーチジュースを大量に買ってこい！」

総真『チッ、分かった、行ってくる。』

釈迦堂「あ、俺もなんか炭酸系でよろしく。」

総真『・・・うぜえ。』

どうしてこんなことになっているかというと、百代と共に修業をしていたが、あまりにも暑いため、百代が飲み物欲しさに提案してきたのだ。

３０分後

未だに総真は帰ってこなかった。

百代「いくらなんでも遅すぎる。」

釈迦堂「一体どうしたんだ。まさか、誘拐か！？」

百代「それはヤバい！早く助けに行かないと！誘拐した奴は楽に殺してやらん！」

鉄心「バカたれが！」

ゴンッ！

百代「痛ッ！何するんだジジイ！」

鉄心「お前が変なことを考えとったからじゃ。さっき連絡が入って、子供が車にはねられそうになったのを助けたそうじゃ。いましがた連絡が入った。」

百代「そうなんか、だがどうしてすぐに帰ってこないんだ？」

鉄心「なんでも、その助けた子にいろいろ問題があるらしくてのう。その子を連れて帰るから遅くなっているようじゃ。」

百代「そうなのか、なら仕方ないな。」

鉄心「おお、そうじゃ、忘れとったわ。お前を呼んでおる子がおったぞ。」

百代「誰だ？ここ最近はあまり暴れてはいないぞ。」

鉄心「お前は、総真とたいして年の変わらん子じゃったぞ。」

百代「誰だ？とりあえず行くか。」

そう言って、百代は玄関へと向かった。

一方、総真は公園にいた。そばには白い髪の女の子がベンチに座っている。

総真『大丈夫か、小雪。』

小雪「うん、だいじょうぶだよ。」

総真『そうか、少し休むとしよう。』

小雪「わたしならだいじょうぶだよ。」

総真『体中傷だらけの奴が何を言っている。』

小雪「ごめんね、めいわくかけて。」

総真『別に、第一迷惑ならここまで関わっていない。』

総真『（そう、少し前の俺だったらな。）』

彼女の名は小雪。総真が助けた少女である。百代との戦いに負けた総真は商店街まで飲み物を買いに行っていたんだが、そこで車にひかれそうになった彼女を見つけた。ちなみに商店街の人たちとは、商店街で泥棒をしていた奴を捕まえたり、その知識を使って、人を助けたりしたことがあり、仲は良い。
そこでジュースを買い、小雪を助けたのである。それだけならばこれで終わりなのだが、助けたときに体に違和感を感じ、調べるとまるで虐待を受けた後のように、体中が傷だらけだったので。その後、警察がやっぃぇ来たが、このことを鉄心に相談すると言うと、返してくれて、川神院に向かっている最中なのである。

総真『そろそろ行くぞ。良いか？』

小雪「うん、だいじょうぶだよ。」

総真『・・・そうか。』

そう言って、2人はまた歩き出した。そして多摩川沿いを歩いていると、見知った顔を見つけた。

総真『あれは、あｎ・・百代か。』

そこには見知らぬ子どもたちとともにいる百代がいた。

総真『どうしたんだ？』

小雪「どうしたの？」

総真『いや、知り合いがいたからな。これをさっさと渡しておくか。』

そう言って、２人は百代たちへと近づいた。

時間は少し遡る。

あの後、玄関へと向かった百代を待っていたのは、自分と同年代の

少年、直江大和であった。少年がここにやってきた理由は、百代に手伝ってもらうためだ。
何を手伝ってもらうかというと、少年たちのグループ、風間ファミリーが上級生と喧嘩をしたのである。その後、上級生には勝てず、ボロボロにされたが、リーダーの風間翔一は上級生たちにリベンジすることにしたのだ。それも今日に、である。しかし、それではこの前の二の舞になることは明らかだったため、最強と謳われる川神百代を頼ったのだ。
その後、事情を聞いた百代はその戦いを手伝うことにし、戦いの場所である多摩川沿いに行くこととなった。そこで風間ファミリーを紹介してもらい、あと少しで上級生たちと戦うと言う時に、近くに良く知った気を感知した。

総真『何をしているんだ？』

百代「おお、弟よ。お前こそ何をしているんだ？」

総真『これをお前に渡すために来たんだ。』

百代「おお、結構買ってきたんだな。」

総真『ああ、じゃあな。俺は刑部さんにこれを渡してじいさんに小雪について相談しなければいけないんだ。』

百代「そうか、小雪と言うのか。私は川神百代だ、よろしく。」

小雪「よろしくー、マシュマロ食べる。」

百代「ああ、もらおうかな。」

総真『だから、じゃあｎ「ちょっと待ったー！」・・・何だ。』

バンダナを付けた少年「俺たちを無視するんじゃねえ！俺の名前は風間翔一、よろしくな！」

大和「直江大和だ、よろしく。」

少女「私は岡本一子よ！よろしく！」

大柄な少年「俺様は島津岳斗ってんだ、ガクトって呼んでくれ。」

小柄な少年「僕は、師岡卓也。モロって呼ばれてる、よろしくね。」

総真『それで、一体なｎ「フン、またやられるためにくるとは、お前たちも馬鹿だな。」・・オイ。』

翔一「なんだと！そう何度も負けるか、こっちにはモモ先輩もいるんだからな！」

上級生「フン、この数を見てもそう言えるかな？」

すると、上級生のリーダーの後ろからぞろぞろと人が出てきた。数にして約８０人ほどである。

一子「そんな、こんなにいなかったはず。」

翔一「てめえら、きたねえぞ！」

上級生「フン、お前たちだって助っ人を読んであるだろうが。今度は前よりひどい目にあわせてやるよ。」

百代「御託はいいから、さっさとかかってこい。」

総真『はあ、さっさと終わらせて帰ってこいよ。』

そう言って、総真は小雪を連れて帰ろうとしたが、上級生たちが邪

魔をした。

総真『なんだ？』

上級生「お前たちも仲間なんだろう、同じ目にあわせてやるよ。」

総真『俺たちは関係ないと言っても無意味そうだな。』

百代「ああ、だから手伝え。」

総真『俺がいなくても問題ないだろうが。』

百代「さっさと帰りたいんだろう、だったら手伝ってくれ。」

総真『・・・はあ、小雪。あいつらと一緒にいろ。』

小雪「そうまは？」

総真『面倒だが、さっさと終わらしておくから待っていろ。』

小雪「うん、まってる。」

そう言って、小雪は翔一たちの元に行った。

翔一「オイ、そこにいたらモモ先輩の邪魔になるぞ！」

百代「安心しろ、キャップ。こいつは私とほぼ同格だからな。」

総真『・・・行くぞ。』

百代「さあ、絶滅タイムだ。」

そう言って、2人は突っ込んでいった。

風間ファミリーの面々は唖然としていた。それは、目の前で起こっていることがあまりにも常識離れしすぎていたからである。
しかも、途中から来た自分たちと同年代の子まで凄まじいのでなおのことビックリしていた。さっき百代が言ったことは、あくまである程度強いだけだと思っていたからであったからだ。

小雪「わー、すごい、すごーい！」

ガクト「なんだありゃあ、現実か？」

翔一「すげえな、オイ！」

そう言っている間に、また何人かが吹っ飛ばされた。そして、そうこうしている間に残すところ上級生のリーダーを含む数人となった。

上級生「な、なんなんだよ、お前たちはぁ！」

総真『・・・別に、ただの通りすがりだ。』

百代「ま、私たちに勝とうなんて千年早い。」

上級生「（くっ、だが隙を見てあいつらを人質にして、こいつらもあいつらと同じ目にあわせてやる。）わ、わかった、降参するから許してくれ。」

百代「どうしようか、弟？」

総真『どうせ、隙を見てだれかを人質にとって反撃しようとか考えているんだろうが、あいにくと俺は今、貴様等のせいでとても気分が悪い。五体満足でいられると思うなよ。』

そう言って、総真は上級生に近寄った。

上級生「ヒィッ！た、助けて」

百代「さて、お前ボコすけど、良いな。答えは聞かないがな！」

上級生「ギャ、ギャァァァ！？」

そうして、上級生は2人によって、ボコボコにされた。

百代「はっはっは、私たち2人に勝てる奴はいないな！」

総真『・・・ああ、そうだな。』

百代「む、総真がデレた！」

翔一「おーい！お前ら、凄かったな！」

一子「ホントにねえ。」

ガクト「確かに、俺様でも勝てるかわからないぜ。」

モロ「アハハ、ガクトじゃどうやったって勝てないよ。」

小雪「そうますごーい、ましゅまろいる？」

総真『・・・1つだけな。』

翔一「よーし、決めた！2人とも、俺たちのファミリーに入れ！」

百代「良いぞ。」

総真『・・・却下だ。』

翔一「お前も入れよ。」

小雪「いいの？」

総真『・・・聞けよ。』

小雪「やったー、そうまもはいるよね？」

総真『・・・いや、俺はｈ「当然、総真も入るぞお。」モモ、てめえ。』

百代「良いじゃないか、きっと楽しいぞ。」

総真『・・・はあ、よろしく。』

翔一「おう、よろしくな！」

こうして、総真たちは風間ファミリーに入った。

Ｅｐｉｓｏｄｅ３　日常

あの戦いから川神院に帰り、小雪のことを相談した総真。鉄心はそんな総真に心打たれ、自分がどうにかすると言って、小雪を一時的に預かった。引き取り手がいなければ、川神が養子とするとも言っていた。ちなみに、小雪の親は、虐待をしていたということで、警察が小雪の家を調べ、逮捕された。

川神市　公園

あの戦いの日から数日たち、公園には総真たちも混ざった風間ファミリーがいた。しかし、総真と百代は少し離れたところで話していた。

総真『・・・はあ。』

百代「だから、さっきのことは謝っているじゃないか。」

しかし、総真の表情が優れない。その理由は

総真『人の意見も聞かず、無理やり連れてきた奴が言うな。』

百代「うう、すまない。」

そう、百代は総真を無理やり連れてきたのだ。しかも

総真『だいたい、未だに宿題が終わっていないというのはどういうことだ。しかも、今も遊んで、宿題をしようとしない。』

百代「面目次第もありません。」

そう、百代は未だに夏休みの宿題が終わっていないのだ。だから本来は修業が終わったら、宿題をするつもりだったが、キャップから遊ぼうという連絡があり、百代はそれに乗ったのだった。

総真『はあ、ともかく。今日は夜も宿題をするぞ。』

百代「頼む、それだけは、それだけはぁ！」

総真『黙れ。』

翔一「おーい、何やってんだ？早く遊ぼうぜ。」

総真『ああ。ほら、行くぞ。』

百代「うう。」

そうして、総真と百代はファミリーたちの元に行った。しかし、

総真『ん？』

百代「どうした？」

総真『いや、何でもない。』

そう言って、今度こそ駆けて行った。

そんな総真たちを少し離れたところで見ている、眼鏡をかけている

知的な少年がいた。そばにはもう1人少年が佇んでいる。知的な少年は、遊んでいるファミリーを羨ましそうに、そして忌わしそうに見つめていた。

知的な少年「・・・」

少年の名は葵冬馬。葵紋病院という病院の院長の息子である。その少年のそばに佇んでいるのが、井上準。父親が、葵紋病院の院長の片腕的存在で、その息子である冬馬とつねに一緒にいる。

しかし、何故こんなにも彼等を忌わしげに見つめているかというと、彼の父親が真っ当な人間だと思っていたのに、実は不正を行っていたのだ。しかも、沢山していた。挙句の果てに、自分がその罪を背負わなければいけないということに苦悩し、自分はこんな目にあっているのに、彼らが何も知らず、ただ楽しんで生きているのが気に入らないのである。

そうして、冬馬がファミリーを見ていると、そこから2人の男女が自分たちに近づいてきた。

冬馬「何の用ですか？」

小雪「えっとねえ、いっしょにあそぼーよ。」

冬馬「わたしは、結構ですよ。」

総真『はっきり言ってやろう、何故そこまで俺たちを目の敵にする。』

冬馬「・・・あなたに、何が分かるんですか！」

準「・・・若。」

冬馬は2人の能天気な発言に、苛立っていた。自分はこんなにも苦しい思いをしているのに、彼等がのうのうと生きているのが気に入らなかった。
その気持ちを、2人にぶつけるかのように自分の境遇を暴露した。
何故、そのことを赤の他人である総真と小雪に言ったかは、自分でも判らなかった。

総真『・・・そうか。』

冬馬「同情は結構ですよ。」

総真『阿呆か。』

冬馬「なっ！」

総真『うだうだとくだらないことをほざいてるんじゃない。それで、俺たちを恨んだところで、ただの逆恨みでしかない。』

冬馬「なら僕は一体どうすれば良いんですか！」

総真『そんなものは、知るか。少なくとも、今のお前には絶対に出てこないだろう。そうやって、抗う気のない奴にはな。』

冬馬「抗う？相手は親で、しかも大人ですよ。どうやって抗えば良いんですか！？」

総真『ならこのまま、そのくだらない運命とやらに屈するか？』

冬馬「それは・・・」

総真『確かに、1人なら多くのことはできない。だが、お前は今本当に1人か？』

冬馬「しかし、こんな汚れた血をもつ僕に、そんな人がいるわけが」

総真『くだらない、お前の血が何だ。お前は、お前だろう。他の誰でもない、葵冬馬という、唯一無二の存在だ。だいたいそれなら、さっきからお前のそばにいる奴は人形か？』

冬馬「・・・準。」

準「若、俺はいつまでも若とともにいるぜ。」

冬馬「ありがとう、準。」

準「ああ、そっちもありがとうな。若を助けてくれて。」

総真『別に、いちいちうざい目線で見られるのが嫌だっただけだ。』

準「はは、そういうことにしとくか。」

小雪「おはなし、おわったー？」

総真『ああ、終わったぞ。』

小雪「そっかー。マシュマロたべる？」

冬馬「ええ、もらいましょうかね。」

準「俺ももらおうっと。」

総真『さて、またあの連中がぎゃあぎゃあ言いそうだから、戻るか。』

冬馬「そうですか、ありがとうございました。」

総真『何を言っている、お前たちも来るんだ。』

2人「「はっ？」」

総真『ほら、行くぞ。あいつらに紹介しなければいけないからな。』

小雪「ごー、ごー。」

冬馬「良いんですか？」

総真『まあ、大丈夫だろう。』

冬馬「本当にありがとうございます。」

総真『良いから、行くぞ。』

そうして、2人を連れてファミリーの元へと行った。

その後、ファミリーに相談したが、拍子抜けするほどあっさりと、オッケーが出された。

そうして、冬馬たちを含め、遅くなるまで遊んだ。

冬馬「こんなに楽しいのは、生まれて初めてな気がします。」

総真『そうか、良かったじゃないか。』

冬馬「ええ、ありがとうございます。あなたがいなければ、彼等をずっと逆恨みしていたかもしれません。」

総真『そうか、なら良い。』

百代「おーい、そろそろ帰るぞ。」

総真『ああ、分かった。それじゃあ、またな。帰るぞ、小雪。』

小雪「うん、まだね。」

冬馬「ええ、また。」

そう言って、総真たちは帰って行った。

準「・・・若。」

冬馬「準、帰りますよ。そして、これからも一緒に行きましょう。」

準「ああ！どこまでも若に付いて行くぜ！」

そう言って、２人も帰って行った。その心に希望を携えて。

Ｅｐｉｓｏｄｅ３　日常（後書き）

次回　ｅｐｉｓｏｄｅ４　別れ

ついに、次で幼少期が終わります。

Ｅｐｉｓｏｄｅ４　別れ（前書き）

これで、幼少期は一応終了となります。なんか雑な気がしますけど

Ｅｐｉｓｏｄｅ４　別れ

あれから、冬馬たちを含む風間ファミリーと毎日遊んでいた。小雪は冬馬たちのほうが仲が良い。そして時間がたち、夏休みも終盤へと迎えた。

総真『だから、ここはこうやって・・・』

冬馬「ここはこのようにするんですよ。」

大和「ガクト、ここはこうするんだぞ。」

総真、冬馬、大和の3人で他のみんなの宿題を手伝っていた。大半が宿題を終えていないのである。

百代「もうだめだ、休憩しよう。」

総真『阿呆が、まだ数ページしか進んでないだろうが、まだ行くぞ。』

一子「ええっと、ここがこうで、あれがそうで、アレ？」

総真『そこはそうじゃなくて、こうするんだよ。』

小雪「できたー。」

総真『そうか、正解だな。少し休んでいて良いぞ。』

小雪「やったー。」

百代「あっ、ずるいぞ！」

総真『ならさっさとノルマを終わらせろ。』

大和「総兄さん、そろそろ休ませようよ。いくらなんでもキツいと思うんだけど。」

百代「流石だ、大和。さあ、休もう！」

総真『仕方ないな、少しだけだぞ。』

翔一「やっほう！」

ガクト「これぱっかりは、俺様でも無理だぜ。」

モロ「総兄さん、ゲームしない？」

総真『まあ待て、冷たい物を持ってくるから、先にやってろ。』

そう言って、総真は冷たいものをとりに行った。ちなみに風間ファミリーでは大和、モロ、一子には総兄さんと呼ばれている。何故そう言われているかと言うと、総真は結構世話焼きで、宿題を手伝ったり、料理をしたり、遊び相手をしたりしており、年上の雰囲気を持っているためである。

総真『おい、持ってきたぞ。』

一子「ありがそう、総兄さん！」

翔一「悪いな、総真。」

百代「ピーチジュースはあるのか？」

そうして、全員がジュースを飲みながら休んでいると

翔一「あと少しで夏休みも終わりか、学校行きたくねえ。」

ガクト「確かに、面倒だよな。ま、これからはモモ先輩たちもいるし、楽しくなるだろ。」

総真『・・・百代たちはな、俺はもうここには来れないだろうからな。』

全員『・・・え？』

翔一「お、おいおい総真。一体何の冗談だ？」

総真『あいにくと、こんな悪い冗談言う気は無い。』

翔一「なんでだよ！何でいなくなっちまうんだよ！」

百代「そうだぞ、弟！またジジイに無理にでも連れてきてもらえば・・・」

総真『今回俺をここに連れてくるのにはかなりの反発があったはずだ、それを祖母の手助けがあったとはいえ、無理やり連れてきたんだ。おそらく、次はもう無いだろう。』

百代「そんなの、私たちでどうにかしてしてしまえば良い！」

総真『陽神(あそこ)は煌武院と並ぶ所だぞ、川神がどれほど強くても、あそこには逆らえない。』

百代「そんな・・・」

総真『それと、俺はまだ、諦めるとは言ってないぞ。』

全員『は？』

総真『今は無理でも、将来あそこを抜け出してここに戻ってくるつもりだ。』

百代「大丈夫なのか？」

総真『以前の俺ならば無理だと言っていただろうが、今は違う。必

ず帰ってくる。』

小雪「そうま。」

翔一「よーし、ならくよくよしてても仕方ない！帰る日はいつなんだ？」

総真『明後日の夕方だ。』

翔一「オイオイ、あと少しじゃないか。よーし、ならこれからお別れパーティの準備だあ！」

総真『お別れパーティ？』

翔一「ああ、帰る日の昼から始めようぜ！」

全員『おー！』

そう言って、全員が準備のために立ちあがった。

総真『待て、その前に宿題はどうするつもりだ？』

翔一「そんなの関係ねえ！仲間の別れのほうが重大だ！」

総真『お前等。・・・ついでに宿題も有耶無耶にしようって魂胆じゃないだろうな。』

一瞬、翔一を含む宿題が終わって無い組の動きが止まった。

総真『はあ、まあ今回は何も言わないさ。』

翔一「流石総真、話が分かるぜ！」

そうして、総真を除く全員が準備のために部屋を出て行った。

総真『さて、仕方ないからこっちは俺が終わらせておくか。』

そう言って、総真は宿題が置かれた机に向かった。

そして時はたち、2日後。川神家にてお別れパーティが開かれた。参加者は総真に百代、小雪に冬馬と準。そして風間ファミリーに鉄心、ルーと釈迦堂が集まっていた。そして、パーティは始まった。

総真『結構綺麗に作ったな。』

鉄心「ワシらも手伝ったからのう。」

総真『すまない、じいさん。』

鉄心「なあに、可愛い孫のためになら喜んで力を貸すわい。」

釈迦堂「しかし、てめえの面ももう見納めか。寂しいねえ。」

総真『刑部さん、俺は必ず帰ってくる。絶対に。』

釈迦堂「そうかい、ならその時を楽しみにしとくぜ。」

ルー「総真、決して戦いに心を奪われてはダメヨ。お前ならきっと

間違わない道を歩んで行けるヨ。」

総真『分かってます、ルーさん。』

百代「弟よ、私は悲しいぞ。だが、ずっと待っているからな。」

総真『ああ、待っててくれ。絶対帰ってくるから。』

百代「デレた、総真がデレた！」

総真『うっさい！』

そうして、パーティは進行していく。外を見ると、日がだいぶ落ちていた。

総真『じゃあ、お前たちに渡すものがある。』

翔一「何だ？」

総真『時間の都合上、１つしかできなかったが、受け取ってほしい。』

そう言って、総真は懐から平べったく、白い色の勾玉のネックレスを渡した。正確には太極図の白い部分の形をしていて、小さい穴に糸が通されている。

百代「これは？」

総真『自分なりに考えてみた仲間の証だ。あまりうまくできていないと思うがな。』

そう言って、黒色の勾玉のネックレスをとりだした。

総真『お前たちに、感謝の形として渡したい。』

２つのネックレスを合わせると、１つの太極図になった。

翔一「おお、凄げぇな。手作りなのか？」

総真『ああ。お前たちは、全てを信じられなくなった俺を変えてくれた。』

百代「・・・総真。」

総真『だから、ありがとう。』

そう言って、総真は笑った。その笑顔は、年相応で、太陽のように明るい笑顔だった。そして、それを見た皆は、その笑顔に見惚れていた。

そうして時間が過ぎ、総真が帰る時間となった。外には、黒いリムジンが駐車しており、1人の女性が出てきた。

総真『じゃあ、また。』

翔一「絶対帰ってこいよ！」

冬馬「あなたには、まだ恩を返し終えていないんですよ。だから、絶対戻ってきてくださいね。」

釈迦堂「ま、楽しかったぜ。運が良ければまた会おうや。」

小雪「まってるから、ぜったいはやくかえってきてね！」

皆、思い思いに別れの言葉を告げる。

百代「・・・総真。」

総真『・・・モモ。』

百代「こういう時ぐらい、姉呼ばわりしてほしいな。早く帰ってこいよ。」

総真『ああ、絶対に帰ってくるさ。だから待っててくれ、姉さん。』

百代「！ああ、行って来い、弟よ！」

そうして、総真はリムジンに乗り、陽神へと帰って行った。

その後、総真は陽神一族に自らの力を使い、一族に貢献するようになる。その功績を認められ、宗主より何かしらの褒美をもらえるが、総真は夏休みの期間のみ川神家へと滞在を許可するよう求めた。一族はそれを許可し、約束通り、川神へと行けるようになった。それ

は初めて川神に行った年から2年後のことだった。その後、川神市へ滞在した時、新たに増えたメンバーとともに、夏休みという短い期間だが、その時は、年相応に楽しんでいた。

そして、百代が高校に入学し、総真たちが中学3年生になった年の春。総真は忽然と、姿を消した。

Ｅｐｉｓｏｄｅ４　別れ（後書き）

ええっと、ちょっと急すぎたかなって思います。次回からは高校生編です。

Ｅｐｉｓｏｄｅ５　再開（前書き）

投稿が遅くなってしまい、すいませんでした。

Ｅｐｉｓｏｄｅ５　再開

とある戦場

女性、川神百代は気がつけば其処に立っていた。しかも、自分は黒いドレスを着て、体中擦り傷だらけでそこに佇んでいた。自分の状況を頭で理解し、ふと前を見てみると、そこにはいくつもの異形の骸が横たわっていた。あるモノは頭部が無く、あるモノは腹に大きな穴が開いており、またあるモノは四肢が千切れていた。
そして、その骸たちの中心に人影があった。それは獣を彷彿とさせる黒い鎧を身に纏い、爪は鋭く、黒い尾をしならせ、口に当たる部分には鋭い牙が生えており、その大きな眼は紅く輝いていた。その黒い鎧には、異形の血と思われる、緑色の液体が全身についていた。

そして、その黒い獣と対峙する者がいた。それと同じく、全身に鮮やかな紅い鎧を身に纏い、緑色の大きな眼を持ち、その手に変わった形の剣を持つ戦士が立っていた。
２人は真っ直ぐに互いを見つめ、対峙していた。すると、ついに２人が動き、激突した。そして、互いの力がぶつかり合い、２人の間が輝き、百代は光に包まれた。

「はっ！？」

ガバッ！と百代は布団から跳ね起きた。

「ゆ、夢か」

「随分リアルな夢だったな。しかし、あの夢は一体・・・」

「お姉さまー、おはよう！」

「おはよう、ワン子。どうしたんだ？」

「どうしたんじゃないわよ、お姉さまが修練の時間になっても来ないから迎えに来たのよ」

「なに？ホントだ、ジジイに怒られる」

「一体どうしたの？」

「ああ、変な夢を見たんだ」

「変な夢？」

「ああ、それでな・・・」

「何をやっておるんじゃ？」

２人「「うわぁ！？」」

「なんじゃ２人して、そんなにびっくりしおって」

百代「ビックリさせるなよジジイ」

「それよりも、一子。ルーが待ちくたびれておったぞ」

「あ、忘れてた！」

鉄心がそう言うと、一子はルーの元へと走って行った。

「それで、夢がどうしたって？」

「ジジイが脅かすから忘れた。でも・・・」

「でも？」

「紅い方は何故か、嫌な感じはしなかった」

「いや、ワシは紅い方と言われても、分からんからのう」

「うっさい、じゃあ言ってくる」

そう言って、百代も鍛錬をしに行った。

とある建物

そこは2階建ての古い洋館が立っていた。そこには「陽神」という表札がつけられていた。すると、外からフードを被った人物が走って洋館に入って行った。

「ただいま」

「お帰りなさい、総真」

「ああ、すまないな、リイン」

そう言って、被っていたフードをとった。そして、銀髪の女性、リインフォースは飲み物を総真に渡した。

「しかし、何故ここまで隠すんですか？」

「まあ、ただ会うだけってのもつまらないからな。少し、趣向を凝らしてみただけだ」

「そうですか」

「それより、そっちの準備はもう良いのか？」

「はい、大丈夫ですよ。それなら、そっちはどうなんですか？」

「何をいまさら、前日に終わらせてある」

「・・・楽しそうですね」

「・・・ああ、そうだな。楽しみだ」

そう言って、総真は笑った。

「じゃあ、シャワー浴びて、着替えてくる」

「はい、あと少しでご飯もできるんで、早くしてくださいね」

「分かった」

そうして、総真はシャワーを浴びに行った

そうして、着替えた後、２人は向かい合って朝食を食べていた。

「ごちそうさま」

「はい、お粗末さまでした」

「さて、そろそろ学校に行くか。早めに行ってとかないと・・・！」

「総真っ！」

「ああ、これは、少し遅れそうだな。お前は学校に連絡して、少し遅れると伝えといてくれ。俺はバイクを出しておく！」

「はい、分かりました！」

そう言って、リインは学校に連絡を、総真はガレージからバイクを出しに行った。そうして、バイクを入口に出すと、リインが家から出てきた。

「連絡しておきました！」

「よし、早く乗れ！」

「はい！」

そうしてリインを乗せると、バイクを最高速で動かしていった。

川神学園　グラウンド

そこには、川神一子と、転校生、クリスティアーネ・フリードリヒが互いにレプリカの武器を持って対峙していた。しかし、これは決して殺し合いなどの類ではなく、この学園独自のシステムなのである。これは、決闘と言って、互いの同意の元、戦いの方法を決めて戦うというものである。ちなみに、肉体を行使する場合は、学校側に了承を求めなければならない。そして、川神鉄心の監督の元、決闘が始まった。最初は押していた一子だったが、クリスの攻撃により、敗北した。

「そういえば、おじいちゃん。あと1人転入生がいるんだよね？」

一子のそばにいた鉄心に、風間ファミリーが集まってきた。

「うむ、新しい副担任もの」

「オイジジイ、いないじゃないか？」

「そういえば、誰なんすか？男、女？」

「それがのう、転入生は男で、副担任は女性であることしかわかっとらんのじゃよ」

『ハアッ！？』

「いや、その2人の推薦人がワシのちょっとした知り合いでの。結構強引に迫ってきたんじゃよ。それに、向こうが言うには、これから先、絶対に必要な2人じゃと言っておった」

「オイ、ジジイ。まさか、そいつに惚れてたりするんじゃないだろうな」

「それは無い」

百代の発言に、当たり前のように答える鉄心。それを聞いて、全員がずっこけた。

「では、何故、その人のおねがいを了承したんですか？」

「うむ、あ奴の言うことは、バカにできんからのう。それに、その時の眼が、ふざけている感じでは無かったんじゃよ」

「しかし、学長。流石にまだ来ないのは問題ｋ「Ｂｒｕｒｕｎ！」何だ！」

今だに来ない生徒と教師のことについて、進言しようと、大和たちの教師、小島梅子は鉄心に近寄る。すると、騒音と共に、バイクがうねりを上げて、校舎に入ってきた。そして、鉄心の近くで、急ブレーキをかけ、停止した。そこには、２人の男女が座っていた。見るところ、運転をしている男子は学園の制服を着ており、後ろに座っている女性は、スーツを着ていた。

「誰だっ！」

鉄心のそばにいた小島梅子がバイクに乗った２人組に近づき、問いただそうとする。

「ああ、すまない。できる限り早く来ようとしてな、悪かった」

「お前は？」

バイクに乗っていた少年が降り、ヘルメットを外す。そして、それを見た鉄心と風間ファミリーは、驚いた。

「今日この学園に転入した、陽神総真と言う者だ」

そこには、２年前に姿を消した少年、陽神総真が立っていたからだ。

総真ＳＩＤＥ

俺は今、数人の生徒に囲まれて、包囲されている。その生徒とは、言わずもがな、風間ファミリーのメンバーである。理由は当然、何故唐突に消えたかということだ。百代は何故か、俺の後ろに立ち、思いっきり抱きついてくる。逃げられない。

「オイ、聞いてんのか！」

「ああ、聞いてるよ・・・多分」

「多分かよっ！」

「そーま、久しぶりだね！」

「ああ、久しいな、ユキ」

「ずっと心配していたんですよ」

「そうだぜ、俺たちがユキをなだめるのにどれくらい、時間がかかったか」

「悪いな、冬馬、準」

「久しぶりの再会で悪いが、ちと良いかの」

「久しぶりです、じいさん」

「ほっほっほ、久しいのお、総真。では、とりあえず、教室に戻るとしよう」

じいさんがそう言うと、外に出ていた生徒は教室へと戻って行った。

俺たちは、自分たちのクラスへと向かって行った。ちなみに、途中でバイクをどうするかということになり、自転車置き場に置いてきた。

そうして、今は自分のクラスで紹介をするところだ。

総真ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

ＮＯ　ＳＩＤＥ

「初めまして、陽神総真だ。ここには、２年前まで時々来ていたから、もしかしたら、知っている奴がいるかもしれない、よろしく」

「リインフォース・アインと言います。これから、このクラスの副担任を務めさせていただきます。よろしくお願いします」

２－Ｆの生徒の大半は、総真たちを見て、動きが止まっていた。少したつと、殆どが騒ぎだした。すると、教師である小島梅子が鞭で床を叩いて、静かにさせた。

「静かにせんか！それ以上騒ぐと罰を与えるぞ！」

さらに鞭を地面にたたくと、生徒は完全に静かになった。

「では、2人への質問を許可させよう、遅れてきた罰としてな」

「はいはい！陽神君って彼女はいるんですか？」

「そんなことしか聞けないのか、スイーツ脳が」

「黙ってなさいよ、キモオタのくせに！それで、どうなんですか？」

「俺か？いや、いないが」

「そうなんだあ」

「はいはーい！じゃあ、アイン先生はどうなんですか？」

「私もいませんよ」

「へえ」

「そういえば、風間君たちと仲良さそうだったけど、どうして？」

「ああ、それは昔から一緒につるんでたからだよ。といっても、都合で夏休みの間しかこっちにいなかったんだけどな」

「そうなんだぁ、モグモグ」

「熊飼！質問中にお菓子を食べるな！」

「うっ！ごめんなさい」

「そういえば、アイン先生と陽神君、一緒に来てたけど、家族？」

「いや、一緒に住んでるだけだ」

『ええ！！』

「何だ？」

「お前、それは本当か！？」

「何だ、ガクト。本当だが」

「神は死んだあ！」

「なあ、大和。何故あいつらは絶望に堕ちたような顔をしているんだ？」

「いや、そりゃあ総真がアイン先生と同棲してるからだろ」

「それだけか、家族みたいなもんだし、何か問題があるのか？」

「えっと、付き合ってるとかじゃないの？」

「全然」

「・・・そうなんだ」

「ええ、付き合っているわけではありませんよ・・・今はですけど」

最後のほうは声が小さくて、誰にも聞こえなかった。近くにいた大

和を除いて

その後、色々と質問をしていった。

「では、陽神の席は窓際の1番後ろだ。」

「ああ、分かった。」

そう言って、総真は自分の席に向かった。そうして、通常通り授業が進んでいった。

Ｅｐｉｓｏｄｅ６　戦い

川神学園　放課後

そこでは、授業を終え、下校をしている生徒たちが歩いていた。その校門前にて、総真と翔一は話していた。

「なあ、今日基地にこれるか？」

「すまない、今日はまだ荷物を整理し終えていないんだ。」

「そっか。」

「すまないな、来週の集会には行けるんだがな。」

「わかった、じゃあ今度はちゃんと来いよ。それと、明日は遊ぼうな！」

そう言うと、翔一はどこかへと走って行った。

「俺も、さっさと帰るか。」

そう言って、総真も家へと帰って行った。

夜　陽神家

そこでは、荷物の整理をしている総真がいた。

「ただいま帰りました、総真。」

「ああ、おかえり。」

「すいません、なかなか終わらなくて。」

「気にするな、それよりも晩御飯はどうする？」

「私が作ります。作って無いですよね？」

「お前がやりたいって言ったんだろう。別に今日ぐらい問題は無いだろうに。」

「すいません、でもやはりこれくらいは・・・」

「まあ、良いさ。それと、早く作ってくれ。正直腹が減った。」

「はい！」

リインは微笑んで答えた。そして、ご飯の準備に取り掛かる。

「しかし、あいつらから何か連絡はあったか？」

リビングでソファーに座っている総真は、料理の準備をしているリインに問いかける。

「今のところはないですね。」

「そうか、まあとりあえず待つとしよう。」

「そうですね。しかし、ここは変わったところですね。」

「否定はしないが、俺達が言うことじゃないな。」

「確かに。・・・さて、あと少しでできるので、準備を手伝ってください。」

「ああ、分かった。」

そう言って、総真は準備のためにソファーから立ちあがった。

「ご馳走様。相変わらず美味いな。」

「お粗末さまです。そう言っていただけるとありがたいです。」

「さてと、アイツはまだ来ないとして、どうしたものか。」

「どうとは？」

「分かってるだろうが、アイツらだよ。お前だって本当は・・・」

「私は、永劫貴方について行きますよ。」

リインフォースは真っ直ぐと総真を見つめている。

「・・・ああ、そうだな。だからこそ、まずアイツらを滅ぼさないといけない。俺達が平穏を勝ち取るためには、それしか方法は無い。」

「はい。・・・あと少しですね。」

「ああ、あと少し・・・！？」

「総真！」

「ああ、分かってる。お前は、ここで念のため待機しておいてくれ。」

「分かりました。気をつけてください。」

「ああ。」

そう言って、総真は部屋を飛び出した。

多摩川沿い

そこでは、葵冬馬、井上準、川神小雪たちは夜遅くから出かけていた。理由は集会から帰っている途中であるからだ。その途中まで小雪が護衛するということだ。

「しっかし、いつも悪いねえ。女なのに護衛してくれるなんて。普通は逆なんだろうけどな。」

「仕方ありませんよ、準。小雪はこの町でもトップの実力を持つの

ですから。」

「そーそー。気にすんなよ、ハゲ。」

「ハゲって言うんじゃありません！」

「しかし、唐突に総真君が帰ってきましたね。」

「確かにな。あれは本当にびっくりした。」

「総真と久しぶりに会えて本当に嬉しかったよー！」

「良かったですね、ユキ。」

「えへへ・・・！？」

すると、突然小雪は眼を見開き、止まる。それを見て2人は歩みをとめた。

「どうしたんです、ユキ？」

「・・・こっちに来て！」

すると、突然小雪は2人の手を引っ張り、歩いてきた方向に走りだした。

「ど、どうしたんだ！？」

「分からない。けど、とてもいけないものがいる！」

「いるったって、いねえぞ！」

「けど、いる！」

「・・・とりあえず、逃げましょうか。ユキがいけないと言うほどのモノがいるなら、すぐに逃げた方が良いでしょうし。」

「しかし、それは無理だな。」

すると突然声が聞こえた。その場には3人以外存在していないというのに。

「貴方は、何？」

「俺か？そうだなあ、化け物ってところか。」

すると、突然目の前に大量のコインが現れ、それが１つに集まると人型の異形へと姿を変えた。その姿はどことなく狼を連想させる姿をしている。

「貴方は！？」

「だから、化け物だって言ってんだろ。まあ、本当の名前もあるんだけどさ。とりあえず・・・」

「何が目的ですか？」

「そうだな、お前たちの闇を貰うとするか。」

「闇？」

「ああ、本当はまだ目覚めてないんだけどな、もう少しで目覚めるから、その時の食料が必要なのさ。」

「食料？」

「どういうことだ、一体？」

「まあ、これ以上話す必要は・・・！？」

すると、小雪が一瞬にして化け物に詰め寄った。

「ユキ！？」

「はっ！！」

そして、その化け物を蹴る。しかし・・・

「おっと、あぶねえあぶねえ。」

「え？」

その化け物の体は多くのコインへと変わった。そして、ばらけたコ

インが別の場所に一か所に集まると、また元の化け物へと戻る。

「一体、貴方は・・・」

「さてと、さっさと終わらせて、ばらまくと・・・！？」

すると、化け物は突然大きく跳び上がり、小雪達の頭上を越え、反対側に降り立った。すると次の瞬間、化け物がいた場所が爆発した。まるで、何かが地面に撃ちこまれたように抉られていた。

「何者だ？」

「・・・」

すると、そこには1つの異形がいた。金色の2つの角、紅い鎧と瞳を持つ新たな異形。先ほどの化け物と違う点を上げるならば、生き物のような化け物と違い、鎧を纏っているような感じである。

「お前は確か・・・クウガだったな。」

「・・・」

しかし、クウガと呼ばれる異形は言葉を返さない。

「・・・クウガ？」

「おいおい、もうちょっと会話ってやつを楽しもうぜ・・・っと、あぶねえ。」

異形の言葉に、クウガはいつの間にか接近して、異形に蹴りを放つことで返す。

「・・・」

「さて、どうしたもんか。この状態じゃあ、俺はまともにやりあえないだろうしな。」

「・・・」

すると、クウガは構えた。しかし、その異形がとった行動は・・・

「じゃあ、逃げさせてもらうぜ。なんたって、逃亡は得意なんだ。」

逃走だった。

「逃げるんですか？」

「お、威勢が良いな、お坊ちゃん。しかし、そいつがいなけりゃお前さんたちが危なかったんだぜ。」

その言葉に、口をふさぐ冬馬。

「しかし、まさかクウガがいるとはね。これはもしかしたら、アレの適合者になっちまうかもしれないな。」

「アレ？」

「おっと、喋りすぎちまった。じゃあな、仮面ライダーさんよ。また会おう。ま、アイツらが蘇ったら、嫌にでも会えるさ。ああ、それと・・・」

すると、異形は再び足を止め、クウガと向き合う。

「お前が倒してきたアイツら、また蘇るぞ。」

「！？」

その言葉に、クウガは目に見えて動揺した。しかし、すぐに落ち着いた。

「ま、いつの世も、救いようのない連中は沢山いるってか。じゃあ、また会う時までに死なないでくれよな。」

そう言って、異形は多数のコインに変わり、天高く舞い上がった。

「ありがとうございます。えっと、クウガさん？」

「・・・」

「だんまりかよ。まあ、良いや。とりあえず、ありがとさん。」

「ありがとー。」

そう言って、小雪はクウガに抱きつく。

「ちょ、抱きつくんじゃありません！」

「良いじゃんかー、ハゲー。」

「全く、すいません。」

すると、クウガは背を向け、右手を上にあげる。すると、空からクワガタのような物体が飛行してきた。

「な、何じゃありゃあ！？」

「おー、おっきいクワガタだー。」

すると、クウガはそのクワガタの上に乗る。すると、そのクワガタは尋常じゃない速度で、その場を後にした。

「帰っちゃったね。」

「ええ、そのようですね。しかし、珍しいですね、ユキ。貴方が見

ず知らずの人に抱きつくなんて。」

「んー、何となくかな。」

「そうかい。俺はもう疲れたよ。早く帰ろうぜ。」

「ええ、そうしましょう。明日は総真君もいますし、沢山話すことがありますからね。」

「うん！沢山話したいなー。」

そう言って、彼等もその場を後にした。

陽神家

「ただいま。」

「お帰りなさい、総真。どうでした？」

「ああ、逃げられた。しかも、戦ったことのないタイプだ。」

「そうですか。」

「しかも、あいつらが蘇るそうだ。」

「！！本当ですか！？」

「さあな。どちらにせよ、敵はいるってことだ。なら、やることは1つ。敵はだれであろうと斃す。ただ、それだけだ。あれまであと少しだ。連中が、アイツらと手を組まないと良いんだが。」

「ええ、本当にそうであれば良いんですが。」

「まあ、良いか。とりあえず、明日はあいつらと遊ぶようだし、お前も一緒に行くぞ。」

「私もですか？」

「ああ、そういうことだ。早く寝るぞ。」

「ええ、お休みなさい、総真。」

「ああ、おやすみ。」

Ｅｐｉｓｏｄｅ６　戦い（後書き）

大変な長らくお待たせいたしました。本当に申し訳ありません。しかも、異様に短くて、申し訳ありませんでした。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1065m/

仮面の王

2010年10月9日23時01分発行